

特集／南部陽一郎

## 南部陽一郎の物理

その広さ、深さに迫る

吉村 太彦

南部陽一郎先生（以下敬称略）は、私の大学院時代の学位論文指導教員であり、かつ青春時代のあこがれの対象であった人でもあり、とうてい完全に客観的な立場からこの人のことを書くことはできない。しかし、私がシカゴ大学を去ってから、おつきあいしていただいたことが、1カ月を最大として数回ぐらいであり、また私が年長者になってからはややこの人を客観的に見ることもできたかと思うので、あえてこの仕事を引き受けることにした。

実に久しぶりに南部の話をもとまって聞いたのは、昨年10月に京都大学基礎物理学研究所での仁科講演会での一般向け講演である。そのときの講演は、自発的対称性の破れをかみ砕いて大学生程度に分からせる内容だったが、例によって、簡潔ながら味のある話だった。いつもどおり、含蓄のあるたとえ話に感心したが、その講演内容よりもさらに印象深かったのは講演後の質疑であった。

質疑の一つにどうすれば物理学をマスターできるか、という趣旨の若い人からの質問があった。南部の答えは、楽しむこと、であった。質問者にはどうすれば偉い物理学者になれるかを知りたいという意図があったかと思われるが、南部は、そんな野心はさておいて、物理学を深く理解することにより楽しみなさい、また楽しむことが新しい創造への糸口である、という趣旨の答えをした。

南部と物理の話をしていると、いつも物理を楽しんでいる、という印象を私は学生時代から持ち続けてきた。ある程度親しくなると、南部は相手の年齢、業績等にあまり構わずに自分がそのときに考えていることを話し出す。当初はなぜ研究者仲間でもあまり話題にならないことを考え続けているのか理解に苦しむ。しかし、30分ほど話を聞いていると、南部の考えが素粒子物理、もっと広くは基礎物理の根幹に関わる問題を扱っていることに気づく。

南部の物理を知るには彼の書いた論文を読むより、彼から話を聞く、しかも完成前に話を聞くほうがはるかに分かりやすい、これが私の持論である。事実、楽しんでいる人から楽しんでいる内容を聞けるのは間違いなく聞くほうも楽しい、その楽しさが理解への近道である、と断言できる。

しかし、楽しみなさいと言われてもどうしたら楽しむようになれるのかを教えられないと、役に立つ忠告とは言えない。これに関して、南部は別なところで“論語”を引用して、“学びて思わざればすなわち暗し。思うて学ばざればすなわち危うし。”（注：原文では、暗い、危うい、という単語にこれとは異なる漢字が使われている。）といっているのがその答えになろう。学びかつ考える、これを同時に心がける、その繰り返しが、南部流の解釈では、楽しむことにつながる、私も全く同感